

「盲ろう者」として自分らしく生きる ～私にとって障害・仕事・支援とは～

中 條 與 子 (Nakajoh Yohko)

第5回

私の日常③ 私が好きな音楽2

カラオケで歌う曲

私は聞こえにくくて、見えにくい「盲ろう者」だ。「盲ろう者」であることは、私のとても大きな部分を占めているが、すべてではない。「盲ろう者」だからできないこと、「盲ろう者」だからこそできることがあると同時に、自分だからできること、自分だからできないことがあることを感じている。そして、もちろんひとりの人間として、「やりたいこと」や「やりたくないこと」があり、それらがぐちゃぐちゃになったものと、日々向き合っているのが私の毎日である。つまり、「盲ろう」として自分らしく生きるということを、もがきながら模索しながら毎日を生きている。そのような等身大の私を、このマガジンの連載を通して、読者のみなさんにぶつけてみたい。

はじめに

今回は、誕生から大学時代の頃までの音楽と私について書いた。今回の「私の日常」シリーズでは、カラオケによく通ったころの時の音楽について、書いていきたい。

カラオケ

音痴だけど、よくカラオケに通った。高校の時は、たまに行った程度だったが、大学生になると、行く機会も増えて、自分からもよく通った。

友人と一緒にいくことがほとんどだったが、母と二人、たまに、母と弟と三人、家族とも行くことがあった。（父は、音楽番組をよくみる人だったが、カラオケには興味をもたなかったようだ。）また、高校の水泳部OB会の二次会は、決まってカラオケだっ

た。元部長だった私なのに、OB会幹事によく指名されたので、自分の行きたい場所、カラオケ屋に事前に予約をした。

カラオケの選曲源になるのが、テレビの音楽番組でもあったが、スイミングに流れる有線音楽放送の音楽も耳に残った。プールでは、人が少ない時に、キックの練習をしたりスカーリングをしているときに聴こえる程度だが、二階のフィットネスジムの時は、意識をして聴いていた。

THE BOOM「島唄」、山根康弘「Get Along Together -愛を贈りたいから-」、特に後者の聴こえ方は、声と音とともに豪華な重低音で好きだった。高音域が聞こえにくい私の耳にも、しっくり届いたのだ。

自分が好きになる曲は、カラオケでも歌いたいたくなる派だ。しかし、「島唄」や「Get Along Together -愛を贈りたいから-」を選曲すると、私の声で歌うのはとても難しい。歌手と同じ音程で歌うことは、低い声を出すための腹筋が足りなかった。同じメロディーキーで、高音を出して歌おうとすると、私の可聴範囲を超えるようだ。本人は歌っているつもりでも、「朧月夜」や「荒城の月」をピアノの音に沿って歌えなかったように、微妙な抑揚をメロディに沿って歌うことはできなかったと思う。

スイミングで泳いだりトレーニングすることをやめた後、有線音楽放送を聴く機会は失われたが、コンビニエンスストアでアルバイトをすると、再び聴く機会が訪れた。しかし、レジで商品をバーコードで読み取ったり、タバコの銘柄を聴いたり、いろいろなコミュニケーションがうまれるコンビニの仕事では、スイミングの頃のように、優雅に音楽を聴きいることは当然できな

った。

シティホテルでアルバイトしていたころは、グランドピアノの生演奏を聴くことができた。

週末やチャペルで挙式があるとき、玄関横にある喫茶室のグランドピアノに、二人くらのピアニストが交代で演奏をしていた。

私は、一階玄関口に立ち、手動ドアも自動ドアも開けて、客に歓迎や感謝の気持ちを言葉短く伝えることが主な仕事だった。ピアノの音が聴こえると、来館者が多く見込まれるというサインでもある。タクシーや車の送迎、挙式者を控室や宿泊する客室への案内、地下駐車場が満車になれば、地上の駐車スペースなき場所に駐車する場所をつくり誘導する仕事もある。のりきれるか、プレッシャーを感じると同時に、プレッシャーをほぐしてくれるような、余裕を与えてくれるような音楽でもあった。少し距離がある場所からのピアノが聴こえるので、ピアノで会話が聞こえないということは、記憶にない。(周りのスタッフは、ピアノで私が「仕事の指示が聞き取れていない」と感じさせていた可能性はある。)

私が客に挨拶をしたり、言葉をかけたりするときも、ピアノのメロディが聴こえると、その分だけ、心を込めて伝えることができるような気持ちになった。その二人の演奏者がよく弾いていたセリーヌ・ディオーン「My Heart Will Go On」は、私のカラオケの選曲リストに取り組みされた。英語が下手でも、なんとなく歌えている気分になった。

X JAPAN「Tears」は、よく選曲した。「何処に行けばいい/貴方と離れて」と語るように始まる曲を、中学生の時、母の友人

作のダビングテープを、ラジカセをイヤホンで聴いて好きになった。この曲も高音で歌う必要があるが、

当時のX JAPANのイメージから、かなりかけ離れた曲だったので、「こんな曲があるんや」と一緒に行く人からよく聞いた。

昨年、久しぶりにカラオケに行ったので、「Tears」を歌いたくなった。一緒に行った友人たちは、仕事で英語を使う人たちなので、二番の英語の歌詞で音痴以上のものをお披露目してしまうことを鑑みて、少し迷った。歌いたい気持ちが勝って、選曲をした。予想通り、下手とも上手とも直接的な言葉はないけれど、友人たちらしい、温かいなかにも、ほんの少しだけ含蓄のある感想をいただいた。

「Tears」は、中学校から二十年以上、ずっと聴き続けてきた曲で、英語の歌詞は暗記しているけれど、正しい発音で歌えない。それでも、音律にのせてうたうことが、心地良い。悲しみのなかに希望があることを教えてくれる「Tears」でもあるけれど、それ以前に、私にとって校歌のような、空気のような音楽だ。やっぱり「Tears」が好きと思った。